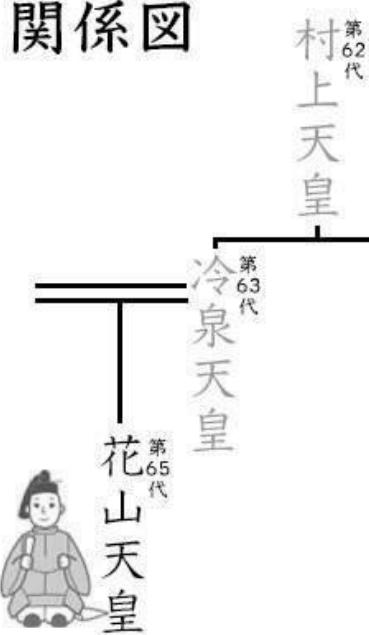


「花山天皇の出家」人物相関図



春宮を天皇に即位させて
自分たちも権力を持ちたい
そのため、花山天皇には早く
出家してもらいたいと思っている

<https://shingakunet.com/journal/exam/2020121600001/>



「花山天皇の出家」本文解説②

さりける先に、手づから取りて、春宮の御方とうぐう 打^{ハシ} 遊^{ハシ}
ならなかつた前に、(粟が)自分の手で取つて、皇太子のところ

詞動四他語春語粟完過去已にお移し申し上げなさつてしまつたので、(花が)お帰りになるような

に渡し奉り給ひてければ帰へらせ給はむ S K 語↓花語↓花語↓栗 語↓花語↓花語↓栗 尊敬用曲定體

ことはあるまじく思して、しか申させ給ひ S K 語↓花語↓花語↓栗 語↓花語↓栗 尊敬用曲定體

けるとそ(聞きける)。過去体 S K 語↓栗 消然用

なさつたと(聞いた)。過去体 S K 語↓栗 消然用

に、月の顔にむら雲のかかりて、少し暗がりに、月の面にむら雲がかかつて (花山天皇が)明るい(月)の光をまぶしく気が引けることとお思いになつて、そのように申し上げ

ゆきければ、「わが出家は成就するなり 「私の出家は、成就するのだ

いったので、 S 語↓花語↓花 尊敬用

詠止 嘆止 過去已

けり。」と仰せられて、奉り出てさせ給ふほ 歩き出しなさる

かかつて S 語↓花語↓花 尊敬用

断定用

なあ。」とおっしゃつて、

や 同格

どに、弘徽殿の女御の御文の 日ごろ破り残

□「花山天皇の出家」本文解説③

花山天皇の出家」本文解説

□「花山天皇の出家」本文解説③

どに、弘徽殿の女御の御文の時に、弘徽殿の女御の御手紙で、ふだん破らずに、日ごろ破り残す。されど、御覽じけるを、御身も放たず、御覽じけるを、打消用語花を、過去体を、残して肌身離さず、ご覧になつた御手紙を、

どに、弘徽殿の女御の御文の
ごきでん
時に、弘徽殿の女御の御手紙で、
同格

■論語について（一年後期期末の復習！）

●論語

↓孔子の言行や弟子との問答・教えについて、後世に弟子たちがまとめたもの

○儒家

↓孔子とその弟子たちが形成した思想家集

団

◆孔子について
・春秋時代に魯の国に生まれる

- ・魯の国の政治家として政治改革を行おうとするが失脚
- ↓十数年にわたって諸国を遊説し、理想の政治を説くも、諸侯らには受け入れられず：

【孔子の思想】

- 仁↓孔子が掲げた道徳の理想。他者に対しても「恕（思いやりの心）」をもち、自己に対しては「忠（まごころ）」を持つこと。
- 礼↓社会秩序を維持する根底となる規範。また、「仁」が行為として外にあらわれたもの。
- 徳治主義↓力によるのではなく、為政者の道徳性によって政治を行う。

■「長沮・桀溺」本文解説①

長沮・桀溺、耦而耕。

孔子過之、使子路問津焉。

長沮曰はく、「夫の輿を執る者は誰と為長沮が言うことには、「あの車の手綱を持つ人は誰か。」と。

子路曰はく、「孔丘と為す。」と。
子路が言うことには、「孔丘です。」と。

曰はく、「是れ魯の孔丘か。」と。
(長沮)が言うことには、「それは魯の孔丘か。」と。

曰はく、「是れなり。」と。
(子路)が言うことには、「そうです。」と。

長沮・桀溺、耦して耕す。
長沮と桀溺が、二人並んで耕していた。

孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。

孔子がそこを通りかかり、子路に川の渡し場を尋ねさせた。

■「長沮・桀溺」本文解説②

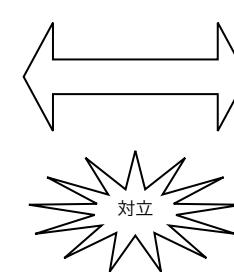
長沮曰、「夫執輿者為誰。」

子路曰、「是魯孔丘与。」

曰、「是也。」

道家—莊子・老子

↓無為自然・民衆論



↓為政者・リーダー論

孔子の弟子たちが記した
儒家思想

○論語

孔子の弟子たちが記した

■本文概要

■ 「長沮・桀溺」本文解説③

曰、「是知津矣。」

問於桀溺。

桀溺曰、「子為誰。」

曰、「為仲由。」

曰はく、「是れなれば津を知らん。」と。

(長沮が)言つことには、「そつならば川の渡し場を知つてゐるだろ

う」

桀溺に問ふ。

(子路が)桀溺に尋ねた。

桀溺曰はく、「子は誰と為す。」と。

(桀溺が)言つことには、「あなたは誰だ。」と。

曰はく、「仲由と為す。」と。

(子路が)言つことには、「仲由です。」と。

■ 「長沮・桀溺」本文解説⑤

且而与其從辟人之士也、

豈若從辟世之士哉。」

耰而不輟。

且つ而其の人を辟くるの士に従はんよりは、
かつまたお前も、つまらない人を避けて立派な人を選んで仕えよう
とする人に従うより、
(いや、俗世を避けて隠棲する人に従う方がよい)。」と

豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや。」

(桀溺は)また種に土をかけて手を休めることはなかつた。

耰して輟めず。

(桀溺は)また種に土をかけて手を休めることはなかつた。

夫子憮然として曰はく、
「鳥獸は与に群を同じくすべからず。
子路行以告。

夫子憮然曰、「鳥獸不与同群。」

吾非斯人之徒与而誰与。

天下有道、丘不与易也。」

夫子憮然として曰はく、
「鳥獸とは、群れを共にすることができない。
先生ががつかりして言つて告げた。

吾斯人の徒と与にするに非ずして、誰と与
私はこの世の中の人々と一緒に生きるのでなければ、一体誰と共に
生きようか(いや、他の何ものとも生きない)

天下道有らば、丘は与に易へざるなり。
もし天下に道があるならば、丘(私)は誰かと共に世の中を改革しよ
うとはしないのだ。」と。

■ 「長沮・桀溺」本文解説④

曰、「是魯孔丘之徒与。」

対曰、「然。」

曰、「滔々者、天下皆是也。」

而誰以易之。

曰はく、「是れ魯の孔丘の徒か。」と。

(桀溺が)言つことには、「どうことは魯の孔丘の弟子か。」と。

対えて曰はく、「然り。」と。

(子路が)答えて言つことには、「そうです。」と。

曰はく、「滔々たる者、天下皆是れなり。」

(桀溺が)言つことには、「水が流れゆくように、世の中がみな悪い
方向へ向かっている。」

而して誰と以にか之を易へん。

それなのに誰とともに世の中を変えようというのか、いや、誰とも
変えられない。